

イチゴのアザミウマ類（ヒラズハナアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ）

○被害と発生生態

成虫の体長は 1.0～1.7mm 程度で、主に花の中や新葉に生息する。成虫及び幼虫が花や幼果の表面を吸汁加害し、加害された果実は着色不良となったり、表面が褐変する。また、新葉では葉脈間に黒色の斑紋ができる。

ヒラズハナアザミウマの雌成虫は暗褐色～黒色である。ミカンキイロアザミウマの雌成虫は橙黄色であるが冬期には褐色となる。両種とも幼虫及び雄は黄色で、肉眼での区別は難しい。

1雌当たりの産卵数は 150～300 個で、雌成虫は葉、花卉などの組織内に 1 個ずつ産卵する。孵化した幼虫は花卉、新芽、新葉などに寄生し加害を始める。2 齢幼虫までは植物上で過ごし、土中などで前蛹、蛹を経て成虫になる。両種とも山口県では野外で越冬が可能で、イチゴ施設では 2 月頃から発生し始め、4 月以降に被害が増加する。

○防除方法

（ア）耕種・物理的防除

- ・施設の周囲に反射マルチを敷き、成虫の侵入及び活動を抑制する。
- ・青色や黄色の粘着トラップを設置して成虫を誘殺し、発生状況を確認する。
- ・栽培終了時には施設を密閉し、他の作物への移動を防止する。

（イ）薬剤防除

- ・多くの薬剤に抵抗性が発達しているため、薬剤散布後は防除効果を確認し、効果が低い場合は他剤に変更し、再度防除する。
- ・抵抗性の発達を防止するため、同一薬剤の連用及び同一系統の薬剤の輪用は避ける。



ヒラズハナアザミウマ
雌成虫



ミカンキイロアザミウマ
雌成虫（冬型）



幼虫



花への寄生



幼果の被害



果実の被害